

UIFA JAPON D'AUJOURD'HUI

今月の話題「日本の女性建築家の50年の歩み」

■CONTENTE

- TOPICS
- ・第9回海外交流の会の報告
 - ・戦後の施策住宅の流れ
 - ・林・山田・中原設計同人の歩み
 - ・女性建築家の軌跡
 - ・両親の家II

■TOPICS

第9回海外交流の会の報告

「日本の女性建築家の50年の歩み」

1月7日(土)、中野サンプラザにて第9回海外交流の会が開かれた。昨年9月にソウルで開催された韓日女性建築家協会主催による韓日交流シンポジウムの報告である。「21世紀の新住居文化—女性が主役である」をテーマとした発表の中で、女性を住まいの担い手、創り手として捉えるのではなく、家や居住空間そのものに女性の性を見出し、21世紀の住居のあり方を考える発想は、中々興味深いものがあった。又、UIFA JAPONでは小川教授が「住居をめぐる日本女性」と題して「日本女性建築家の50年の歩み」を発表した。社会史、女性建築家と会員の作品の紹介、住宅事情の変遷を年代ごとにまとめた年表によるものである。終戦後雨風をしのぐだけの5坪の家から、5坪のリビングのある家になるまで50年。この年表は、女性が建築業界で働く難しさと苦勞そのものであり、又、諸先輩方の功績の集大成でもある。そして、60歳の寿命が80歳となりやがて来る高齢化社会に向けてのシルバーマンションやバリアフリー住宅という新たな課題も提案している。会の最後に出席者全員の賛同により、「日本の女性建築家の50年の歩み」の出版化が決められた。

■役員会の報告

第10回役員会(1995年11月20日)役員10名出席

韓日交流シンポジウムの後始末、UIFA第12回大会日本開催に関する打合せと検討。第8回海外交流の会の総括、第9回海外交流の会の検討。

第11回役員会(1995年12月12日)役員12名出席

■戦後の施策住宅の流れ

船津貴子

戦後の住宅政策の目標は国民すべてを適正な住居費負担で適正な居住水準の住宅に居住させることに置かれていた。このため国は、公的資金を中心とした住宅の供給に努力を重ね国民の住宅に対する要請に対処してきた。昭和25年(1950年)に至って「住宅金融公庫法」と「建築基準法」が制定されたが、これは我が国の住宅建築に関する基本的な制度の柱をはじめて打ち立てたものである。住宅金融公庫による長期低金利資金の貸付制度は、持家促進政策の一環として推進されたが、翌26年には低所得者向け賃貸住宅の供給形態に恒久性と計画性をもたせる必要から「公営住宅法」が制定された。この法律によって、地方公共団体を事業主体とした住宅の建設促進と、家賃を低く抑えるための国庫補助制度とを柱とする住宅供給の政策的基盤が確立されたが、公営住宅制度は財源・行政区域の固定性・供給対象等の面から、都市化に伴い増大、多様化する住宅需要に更に対応する必要が出てきた。

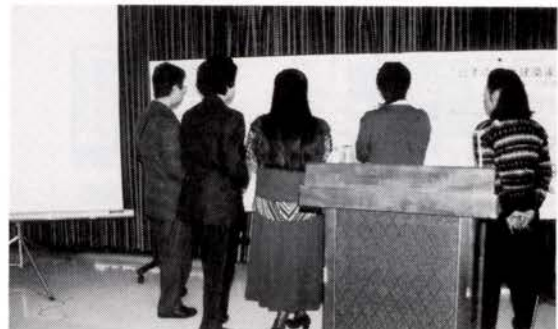
昭和30年の日本住宅公団の設立は、膨大な民間資金を投入して住宅建設資金の枠を拡大し、公的施策住宅の飛躍的増大を可能にしたばかりでなく、団地住宅、市街地住宅、大規模宅地開発事業等を通して新たな住まいづくり、街づくりに対して意欲的な試みを実行することを可能にした。この3本の施策の柱、公営住宅、公庫住宅および公団住宅の制度によって、現在と将来にわたる住宅問題において、国民の多様な需要に対応し得る恒久的な住宅対策の総合的体系が確立されたとみる事ができる。この3つの制度を中心にして昭和30年以降、公的施策住宅の多面的な事業展開が行われたのである。

(日本住宅公団20年史より)

UIFA第11回大会の予定、第12回大会の打合せと検討、第9回海外交流の会の検討。

第12回役員会(1996年1月17日)役員9名出席

UIFA第12回大会日本開催に関する打合せと検討。第9回海外交流の会の打合せ。



UIFA JAPON 事務局

〒102 東京都千代田区麹町2-6-5
 麹町E.C.Kビル(株)生活構造研究所内
 TEL 03-5275-7861

■広報日より

花香る3月 No.15 D' AUJOURD' HUIをお届けいたします。
 併せて本号の発行が遅れたことをお詫びいたします。
 さて、今年9月のUIFAハンガリー大会、次は'98年 日本大会が
 予定されています。準備に向け会員全員が協力しましょう。

■林・山田・中原設計同人の歩み

中原暢子

3人で設計同人を開設したのは1958年の6月のことでした。終戦後女性にも男性と同じような仕事の道、或いは勉強する道が開かれたわけですが、とにかくどうしたら設計の仕事が出来るのか私にはさっぱり見当もつきませんでした。それまでは林は東工大の清家先生のところ、山田は井上一典先生の事務所、中原は東大の池辺先生のところとばらばらで仕事をしていました。共通点としてはpodo koで知り合ったというだけだったのです。そこに横浜の設計の仕事が入って来たのです。それはアルバイトという形でも出来たのかも知れませんが、少し大きなお仕事だったのと、まだまだ若かった私共は「盲蛇に怖じず」の例えの如く、とにかく独立して「自分達の仕事」がしたかったのです。それで設計事務所は出来たのですが、結局横浜の仕事は物になりませんでした。しかし戦後の高度成長のおかげで、設計同人は、今年で38年無事に存続致しております。その間多くの所員やそれぞれの家族に助けられながら、人事権と経営権は共同で、仕事は個人の責任においてという方針できました。そしてやっぱり一人より共同の方がよいというのを確認しながら今まで参りました。人生の大部分をままあま喧嘩もしないで一緒に過ごしてきたわけですが、いよいよこれからが、正念場では無いでしょうか。 以上

■両親の家II-引越しに伴う高齢家族の住い-

小池和子

(会員の作品から)

この家は定年後に雪国のY市から温暖なU市に引越した両親の家である。原型は20数年前の学生時代に設計した両親の家Iである。当時周囲の住いは、玄関に入ると家の中が一目で見渡せる様な間取が多かったが、玄関ホールを核にした動線分離や、くつろぎ空間の茶の間と玄関ホールを壁で仕切り、視線をさえぎる工夫をしている。両親の家IIの設計条件は「これまで住んでいた家と同じ様に」だった。敷地規模はほぼ同じ。しかし道路は南と西から北と西に変わり、さらに南に傾斜している為アプローチや玄関の位置、間取を同じにすることは無理であった。しかし、始めての土地で生活する不安を慣れ親しんだ生活空間で乗切ろうとする両親の意図を大事にし



■女性建築家の軌跡

小渡佳代子

日本の女性は、婦人参政権実現と大学・専門学校男女共学、教育の機会均等が認められ、戦後をスタートした。そのことは、女性建築家を生み、49年には、浜口ミホが女性の家の中のポジションの問題を「日本住宅の封牽制」で発表した。その後、草分的女性建築家が集って、53年「ポドコ」を結成。当時、女性の平均寿命は60歳、特殊出生率3.65人、女子の大学、短大の進学率1.2%でした。40年代は、高度経済成長を境に、家庭電化製品が普及、核家族化が進み、「婦人差別撤廃宣言」が国連で採択された。女性や家庭をめぐる状況は大きく変化し、63年、世界の女性建築家に呼びかけ、「女性建築家の地位の向上・仕事の確保・親睦と情報交換」を目的に「UIFA」が設立された。国内では、73年東京建築士会女性委員会が、76年女性建築技術者の会が発足した。75年以降は、「国連婦人の10年」に当たり、政府、地方自治体、マスコミ等も活発な動きをみせ、多方面に女性初の〇〇が誕生し、関連施設も建設された。「男女雇用機会均等法」が85年成立、男女共同参画型社会の形成へ足がかりとなった。90年には、女子の大学進学率が男子を超したが、出生率は1.53と低く、92年育児休業法施行後上向く。現在、女性の平均寿命は、82.51歳と世界のトップだが、国会議員の女性の割合は6.7%と低く世界63位。しかし、今回、女性建築家の軌跡をたどると、女性は社会の潮流を先取りして設計しているようです。

て、両親の家IIは次の様な生活空間を写し取ることで対応している。

1. 玄関から家族の生活空間がストレートに見えない様にする。
 2. 生活の中心である茶の間を家の中心にして、茶の間・DK・便所洗面所浴室の関係は同じにする。
 3. 茶の間は使い慣れた茶ダンスと神棚の位置を同じ様に仕上る、お土産が収納されているサイドボートのスペースを確保する。
 4. 座敷の床の間・仏壇は同じ位置、向きにする。
- 10数年たち、元気に暮らしてはいるが、介護もし易い水廻りにもそろそろ手を入れようかと考えている。

■第11回UIFA大会のお知らせ

第11回UIFA大会の第1報が入りましたのでお知らせします。

- ・日時 1996年9月1日～8日
- ・開催地 ハンガリー ブダペスト市
- ・テーマ 「建築的遺産の改修」
- ・構成 セッションおよび作品展示(英語、仏語、ハンガリー語)
- ・ポストコングレス ワィーン見学(2～3日)

なお、3月には詳細が送られて来る予定です。